

教義の翻訳はまさしくテキスト化された教えや語りを対象地域の言語に翻訳することである。しかし布教活動が進み、共同体が形成されると、儀礼の必要性も自ずと高まってくる。天理教の儀礼は、海外でも国内でも同じ方法で執り行われる。この儀礼の翻訳は言葉の翻訳とは事態が異なる。例えば、天理教の礼拝方法はタイには存在しないため、タイの慣習にあった形式に変更せずにそのまま行われる。儀礼の所作には意味があり、その意味をタイの慣習に合うように変更することが「儀礼」の翻訳となるであろうが、この儀礼の翻訳は言葉の翻訳以上に困難だと言える。

さらに天理教教義がタイに受容されているかを判断する指標として訳語から発生したタイ語があるかを見ていきたい。例えば聖書が語源の言葉というのは日本語、タイ語に見ることが出来る。これは聖書の訳文が受容され、対象地域に定着した成果と考えられる。それを天理教のタイ語訳に対応させて見ていくと、天理教の訳語が語源となるタイ語は現在では見ることができない。しかし天理教の信仰者の中で浸透している天理教用語は徐々に増えて来ているため、今後の考察の課題となるであろう。

このように宗教に関する言葉や行為の翻訳と布教は相容れない領域のようであるが、この二つが相互に接近する部分を考察することで異文化布教の新しい側面を見いだすことが可能となり、今後多角的に異文化布教をとらえるための足場となるであろう。

## 植民地布教の実態と虚像

——朝鮮布教統計表の解析から——

工藤英勝

一九一〇（明治四三）年八月、日本国による「韓国併合」が発効してから、百一年目を迎える今日でも、この条約に対する歴史認識は当事者間で共有されていない。

「韓国併合」はその後の実態からすれば、単なる政治的事件にとどまらず、民族、経済、文化、教育とりわけ宗教も巻き込んだ構造的ジェノサイドであると筆者は考える。

この植民地統治において、日本宗教の果たした役割や位相については、これまでさまざまな立場からの個別の論及はあるものの、いまだにその実態と全貌が明らかになっていないと言いがたい。

本稿では、朝鮮総督府による朝鮮布教統計のデータにもとづいて、その数値から日本国の統治下にあった朝鮮エリアの宗教団体の実態を解析する。

日本宗教（神道・仏教・基督教）の朝鮮布教に対する歴史評価については、支配者側と被支配者側またはアジア・太平洋戦争の前後とでは対照的な評価があるわけだが、筆者は日本宗教の役割や実態についてはある種の虚像や幻想が共通して存在していると考ええる。つまり、肯定的な文脈であれ、否定的なそれであれ、日本宗教の教勢と実態について過大に評価しすぎているのではないかという疑問がある。

朝鮮総督府が調査発行した各種の朝鮮布教統計は、散逸して全体を閲覧することは困難であったが、一九〇八(明治四一)年から一九四一(昭和一六)年までの三十四年間分のデータを入手できたので、原資料の数値データを校正し、体系的な「朝鮮布教統計表」を作成した。統計項目は多岐にわたるが、本稿では布教所数、布教者数、民族別信徒数に焦点を当てて、植民地布教の虚像と実態を考察していきたい。

韓国併合前夜からの日本宗教による積極的な開教・布教・宣教にもかかわらず、布教所(神社・寺院・教会)数の九割弱は、朝鮮の在来宗教(日本以外の外国基督教含む)によって占められている。支配者側の日本の諸宗教は一割程度にとどまり、客観的には優勢な教勢を保っていたわけではない。

この傾向は、布教者数の数値においても同様であり、朝鮮仏教の僧侶数が全体の六割強を占めていることも影響して、日本宗教はすべて合算しても八%に届かない。

さらに、各宗教民族別の信徒数の割合を見ると、日本諸宗教がどこまで現地住民に食い込んでいたのかが明らかになる。信徒の民族による二極化が顕著である。朝鮮人信徒は朝鮮在来の宗教(朝鮮外国基督教・朝鮮仏教)に集中し、日本諸宗教の信徒はほぼ日本人入植者に限られ、朝鮮人信徒は、五%にも満たない。

以上のことから、植民地支配者や日本宗教による圧倒的な差別・同化・抑圧・干渉・妨害にもかかわらず、①朝鮮外国基督教が全期間を通して優位な教勢を保ち、解放後もその地位を継承する、②「内地」宗教は植民地開教・布教の意図に反して、

「内地人」中心、③神道(教派神道等)は「内地人」大半。神社強制参拝による劇的増加は認められない、④教勢では劣勢であるが「内地」基督教は当初は朝鮮人信徒中心。一九二〇年頃をピークに激減し、「内地人」信徒へ移行、⑤朝鮮仏教は総督府・「内地」宗教による干渉や妨害にかかわらず全体を通して、教勢を維持している。

朝鮮総督府による布教統計は、支配者側のデータという限定はありながら、各宗教の実態を忠実に反映したものになっている。日本諸宗教の統計数値に、朝鮮民衆の日本諸宗教に対する拒否と抵抗姿勢を読み込むことはあながち牽強付会な仮説ではあるまい。